26　次の文章は、「口技」（声帯模写）の達人について書いたものである。これを読んで、問１～４に答えよ。（一部変更、省略あり。なお、設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある。）

〈神戸大〉　二〇一五年度出題

　京　　㆘ ㆓ 口　㆒ 者㆖。口　　人　㆓ 　　㆒、一　卓、一　椅、一　扇、　一　　　　已。衆　賓　　、　、但　㆓ 屛　障　　撫　　　㆒。

　　㆓ 　　　　㆒、　㆓ 婦　　　　　㆒、丈　夫　　。　　㆑ 　声、　㆑ 　　声、一　　 。

　満　　賓　客 （Ａ）㆑ ㆔ 　、微　、　㆓ 妙　㆒。

　 一　人　大　、「火　。」 百　　人　大　、百　　児、百　　犬　。中　　　　声、百　　㆑ 　声、㆑ 　声、凡　所　応　有、無　所　不　有。

　⒝於　是　（Ｂ）㆑ ㆓ ㆑ 　㆒㆑。

　 撫　尺　　、衆　響　 。㆑ 　㆑ 、一　人、一卓、一　椅、一　扇、一　撫　尺　而　已。

（『秋声詩　自序』より）

〔注〕○屛障──ついたて。

○撫尺──拍子木。講談などで語りを強調するとき鳴らすもの。

○少頃──しばらくして。

○深巷──入り組んだまち。

○欠伸──あくびとのび。

○囈語──寝言。

○拍児──子供をあやすように軽くたたくこと。

問１　傍線部⒜「而已」、⒝「於是」をすべてひらがなで書き下せ（現代仮名遣いでよい）。

問２　傍線部（Ａ）「無不頸伸、微笑、以為妙絶」と傍線部（Ｂ）「無不変色離席」はどちらも「賓客」の反応である。なぜ客は（Ａ）では「微笑」し、（Ｂ）では「離席」したのか。それぞれ理由を書け。

問３　二重傍線部「凡所応有、無所不有」をすべてひらがなで書き下し、現代語訳せよ。

◎問４　波線部「一卓、一椅、一扇、一撫尺而已」という句が二回繰り返されている。繰り返すことで何を強調しているのか、五〇字以内で書け。

【解答と採点基準】

問１　⒜＝のみ　⒝＝ここにおいて

問２　（Ａ）＝Ａ町中のさまざまな生活の物音が一斉に聞こえて、Ｂ感心したから。

Ａ＝６〔「一斉に」がなければ減点３。〕

Ｂ＝４

（Ｂ）＝Ａ火事の時の人々の声や物音が聞こえて、Ｂ本物の火事に思えたから。

Ａ＝６〔「火事の時」という内容がなければ０。〕

Ｂ＝４

問３　（書き下し文）およそまさにあるべきところ（は）、あらざるところなし

　　　（現代語訳）Ａすべて火事で聞こえるべき音で、Ｂ聞こえない音はなかった

　　　　　［別解］Ａおよそ火事で聞こえるべき音は、Ｂすべて聞こえた

Ａ＝５／Ｂ＝５

問４　Ａ机といすと扇と拍子木以外は使わず、Ｂ声帯模写だけでＣ町の生活や火事の様子を真に迫って見事に表現したこと。（50字）

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５／Ｃ＝５

【書き下し文】

　にをくするり。口技の中にし、、一、一、一問１⒜のみ。みて坐し、、屛障中に撫尺の一たびりるをく。

　かに中にのゆるを聞けば、ちのきめてする有りて、す。婦ののをく、児のをみてく声、にしくす。

　坐のばし、し、てとさざるし。

　ちにしてす、「これり。」と。にの人大呼し、百千の児き、百千の犬吠ゆ。に火のする声、百千のひをむる声、をする声、問３そに有るべき（は）、有らざる所無し。

　問１⒝にいてをへをれざる無し。

　忽ちにして撫尺一たび下りれば、衆くゆ。屛をしてをれば、一人、一卓、一椅、一扇、一撫尺のみ。

【現代語訳】

　都の中に口技（声帯模写）を上手にする者がいた。口技の人はついたての内側に座り、（用意した道具は）机一つ、いす一つ、扇一本、拍子木一つだけであった。多くの客が囲んで座り、しばらくして、ただついたての内側で拍子木が一度振り下ろされるのを聞いた。

　遙か遠くで入り組んだまちの中に犬が吠えるのを聞くと、すぐに女で驚き目覚めてあくびとのびをする者がいて、男が寝言を言う（のが聞こえた）。女の手が子供をあやすように軽くたたくときの音、幼い子供が乳を含んでなく声が、一度に同じように出た。

　座っている客はみな頸を伸ばし、微笑し、とてもすばらしいと思わない者はいなかった。

　突然一人が大きな声で叫んだ、「火事が起こった。」と。急に百も千もの人が大きな声で叫び、百も千もの幼な子が泣き叫び、百も千もの犬が吠えた。その間に火がはじける音、百も千もの救いを求める声、水をはねあげる音、問３すべて火事で聞こえるべき音で、聞こえない音はなかった。

　そこで（火事に驚いて）顔色を変え席を離れない客はいなかった。

　突然拍子木が一度振り下ろされると、多くの音の響きがことごとくたち消えた。ついたてを取り払ってそこを見ると、一人、机一つ、いす一つ、扇一本、拍子木一つだけであった。